

人文諸学のなかのヨーロッパ中世史

小 野 賢 一

はじめに

中世のパリ大学では、自治の精神の下、ヨーロッパ各地から学生が集まり、*natio*という集団を形成していたという。この集団は、*nation*と直接結びつけて考えられるものではなく、たとえばドイツの*natio*の場合、ドイツ語を話す集団程度の意味合いであったと考えられている。いったいつから国民国家の成員たる民族が成立したのか、という問いはすでに多くの先行研究が存在しており、目新しいものではない¹。西欧全域から遍歴学生が集う国際的な教育機関であった中世の大学は、いつ国家に取り込まれ、国家権力を後ろ盾としてナショナルな知の権威として君臨し始めたのか、そしていつ国家に隷属し、もはやかつての自治の機能の大半を失ったのかという問いは、大学に属する誰もが考えねばならぬ問題であろう。

この論考のもととなる愛知大学人文社会学研究所創設記念シンポジウムの「人文知の再生に向けて」というテーマは、漠然としており、シンポジウム参加者、報告者にとって論点不明瞭に感じられるものであったかもしれない²。実際の論点はシンポジウムの「問題提起」できわめて明確に限定さ

れている³。「問題提起」の趣旨は、「国民国家論による戦後歴史学の超克」さらには「ナショナルな人文学の超克」であると筆者は理解した。「人文知の再生に向けて」というテーマは、ヨーロッパ中世史専門の筆者にとっては、上述の如くnatioという人々の集団や中世の大学の創設などを想起させるものである。だが、問題提起の「国民国家論による戦後歴史学の超克」さらには「ナショナルな人文学の超克」は明らかに近代に特有の人文知を問う課題設定であり、中世史研究者にとって、かなり難題である。それ以上にこの「問題提起」はシンポジウム参加者（哲学者、社会学者、心理学者、文学者、言語学者）にとって難題であろう。果たして「問題提起」の意図は伝わっているのか。

このシンポジウムの論点を理解するために19世紀に確立した「近代歴史学」、1945年以降民主化をめざして展開された「戦後歴史学」、1990年以降にポストモダン思想の影響を受けつつ「戦後歴史学」に対する反省から生まれた「国民国家論」という三つの鍵となる概念について整理し、論点を抽出した後で、「国民国家論による戦後歴史学の超克」さらには「ナショナルな人文学の超克」にかかわる近年のヨーロッパ中世史研究の動向を概観したい。本論考は何事かを実証するものではなく、近代歴史学の誕生以降の歴史学の動向を素描することで大学に属する人々が自らの位相を確認し、未来に向けて議論するための素材を提供することを目的とする。議論が

どういった方向に展開されるかわからない状況では、このような叙述が最適であるを考える。

1 近代歴史学

このシンポジウムの「問題提起」の冒頭で「人文社会に関する学問は市民社会の成立とこれにともなう社会の流動化により、19世紀に誕生する。社会学、歴史学、心理学、文学、言語学などは、中世の学問体系には存在しなかった」と述べられている。社会学者、心理学者、文学者、言語学者にとっては意味不明な導入に思われるかもしれない。この導入の文章がシンポジウムの主題の「人文知の再生」と何の関係があるのか理解し難いであろう。現在の人文知は、近代につくられたものであり、「新しい学問は、権威や権力の道具ではなく、市民社会を豊かにするためとされてきた」が国民国家の成立のせいで、その壁に阻まれ、健全な発展ができなくなったと「問題提起」は主張する。さらに具体的に「主権が市民の手に移り、国民（ネーション）概念が成立するや、地球は国民国家をめざす力のせめぎあい場となって、各国は、互いにその独自性を主張し、内に向かっては統合、外に向かっては国益の守護神と化す。人文知は、そのために生み出され、住民の国民化に寄与してきた」と「問題提起」は述べて、人文知の国民国家への従属を批判する。シンポジウムのテーマ「人文知の再生」とは、人文知を国民国家に対する従属から

解放し、再生せねばならぬという決意表明にほかならない。

人文諸学すべてを扱う力量を筆者は持たない。まず、フランスの事例を取り上げ、近代に成立した歴史学という人文知が如何なる特徴をもっていたかを検証し、シンポジウムの課題に応えたい。そして、漠然とした「人文知の再生」というテーマと、歴史学者以外のシンポジウム参加者、報告者にとって特異な表現形式に思われるであろう「問題提起」の問いかけを検討し、シンポジウム報告者の議論の方向性の乖離を架橋しつつ議論をすすめたい。

近代に成立した歴史学という学問は、理想の社会をつくるための変革のサイエンスとしての役割を担っていた。フランスでは、近世から近代への移行期、すなわち絶対王政期にアンシャン＝レジームを打倒する際、革命政府に正当性を付与したのが歴史学者であった。自由、平等、博愛を旗印に樹立された共和政の神官としての役割を歴史学者は担っていた。主役のブルジョワを補佐するプチブルの代表が歴史家であったといってよい。近代フランスの歴史学は共和政の権威を正当化する学知であった。つまり近代歴史学ははじめから純粹無垢な学問などではなかったのである。「問題提起」が指摘するように、人文学による学問的営為は、自由と中立性を金科玉条としてきたわけでもなかった。キリスト教の神学を主軸として真理の探究に励むパリ大学などは、国家を超えたインターナショナルな活動に熱心な教育研究機関であったの

で、創設期の共和政にとって目障りな存在であったに違いない。フランスではインターナショナルな大学よりも、グラン・エコールが国家のテクノクラートを要請する機関として重んじられることとなった。フランスの高名な歴史学者の大半はグラン・エコール出身者である。つまり彼らは国民国家フランスのテクノクラートとして養成されるのである。原初に、権力に奉仕しない純粹無垢な学問を想定するこのシンポジウムの「問題提起」は少なくともフランスでは当てはまらず、事態はいっそう深刻である。歴史学者は、共和政の教義を創出した過去、ブルジョワジーに奉仕するブチブルとしての自らの出自を振り返らざるを得ないのである。そして、自分が共和政の神官であったという原初の刻印を思い起こすならば、現代の歴史家は国民国家に異議申し立てをせずにはおれないのである。

しかしながら、普遍的な真理であるという確たる証拠のない共和政の教義を真理として奉っていたという点では歴史学者は純粹であったといえる。アンシャン＝レジームを打倒し共和政を打ち立てねばならぬという変革意識の純粹さ、真理としての共和政の教義に基づき人々を教化しなければならぬという使命感の純粹さは、近代歴史学の特徴である。

2 戦後歴史学

元来、歴史学に備わっていた、社会変革の意識が純粹培養

されたのが、我が国の戦後歴史学とよばれる学問の動向である⁴。戦後歴史学においても理想の社会をつくるための変革のサイエンス、それこそが歴史学であるとする近代歴史学の特徴は継承された。戦後歴史学は、近代歴史学の啓蒙精神をそのまま継承し、人々を教化しなければならぬという使命感を内在していた。それゆえ、戦後歴史学では、歴史研究者の「問題意識」が最重要視される。歴史学を専門としない人々にはほとんど理解できないだろうが、この「問題意識」とは、理想の社会をつくるための変革の意識のことであり、この意識が足りないと容赦なく、歴史学者のコミュニティーから非難された。つまりつるし上げにあうのである。近代歴史学において、共和国の歴史家が聖職者の学位候補者を口頭試問で公然と侮蔑し、低い評価を与えることがあったという。ナショナルなフランス共和国より、インターナショナルなキリスト教社会を肯定的に捉える聖職者の「問題意識」を咎めてのことであろう。1945年以降に開始された戦後歴史学以降の歴史学の学位論文の口頭試問も、「問題意識」を評価基準に内在させる傾向がある。近代的人文知＝理性を身につけた真理の裁判官として歴史家は振舞い、特定の思想傾向を調査する思想検査という以上の、真理を審査基準とした「存在」検査がそこでは行われる。そこでは、お前は何者なのか、と自己の「存在」が問われるのである。おそらく現在も世界中の大学の学位論文の口頭試問で時には感情的な軋轢を生むほどに厳

しく学位候補者の「問題意識」が問われているはずである。そして今、シンポジウムの参加者、報告者は問われているのである。

これほど重要な問いかけに人文知を修得しているはずの若い世代が賛同、連帯、拒絶、批判（真理の内容の批判や近代的人文知により真理を裁定するというシステム自体の批判）を含め何らかの見解を表明するどころか、気づきさえしないのならば、戦後歴史学というパラダイムはすでに旧世代のものであり、そうであるからこそ再考し、熟慮した上で乗り越えられるべき時期が来ているように思われる。かつては空気を吸うように戦後歴史学の学知を吸収し、学徒は歴史学を学んだ。シンポジウム報告者を含めた若い世代は戦後歴史学のパラダイムの外にいる以上、戦後歴史学的言説は余程詳しく説明しない限り、時代や状況と切り離された一方通行の無意味な記号として漂うことになるだろう。プレシンポジウムでは「問題提起」に対して、報告者から「何を怒っておられるのか」という率直な意見も提示された。パラダイムの違いが惹起せしめるコミュニケーション不全により、世代を超えて人文知の再生を試みようとし、先行する世代との連帯を模索する若い世代にさえ提起された問題が見えないのである。シンポジウムの趣旨を鑑みると、反論は大いに歓迎されるべきである。だが、戦後歴史学が如何なるものかを知らぬままでは、問われていることにさえ気づかないだろう。そうなる

と議論が噛み合うはずもなく、このシンポジウムは対話なきモノローグの寄せ集めとなってしまうだろう。コミュニケーションの本質は通じ合うことがなくてもお互いに向き合うことにあると肯定的に考えるならば、このシンポジウムの試みも意味のないことではないが、人文知の再生をめざす饗宴としては寂しい。

戦後歴史学では、イギリス、フランスの下からの近代化という進んだモデルとドイツ、ロシア、日本の上からの近代化という遅れたモデルが対置された。戦後歴史学は、進んだモデルに追いつくべく日本の民主化をめざすものであった。この遅れたモデルの国々の研究者は、長い間コンプレックスに苛まれた。近年、ドイツ、ロシア史の研究者の間で実はドイツ、ロシアは遅れておらず、昔から先進的（西欧的）であったという趣旨の研究が散見されるが、戦後歴史学が西欧中心主義的であまりに支配的、抑圧的であったことに対する反発であろう。再生させるべき人文知の発展が不十分で、超克すべき国民国家も不完全な状態の西欧の周辺地域からみると、このシンポジウムの趣旨自体が西欧中心主義的思考による抑圧と感じられるかもしれない。

戦後歴史学には、世界史の基本法則を探るという特徴が見受けられる。1949年の歴史学研究会大会のテーマは、「世界史の基本法則」であった。この1949年の大会は戦後歴史学の基本方針として、その後歴史学者のコミュニティー全体に影

響を与え続けた。キリスト教の終末史観にそっくりな発展段階説、すなわち資本主義社会から進化した先に天国のごとき社会主義が到来するという楽観的な救済史観が、戦後歴史学の特徴のひとつといえる。

さらに、戦後歴史学には近代の問題の起源探しという特徴がみうけられる。戦後歴史学では、近代のパリコミューンの起源に中世のコミューン運動を位置づけたり、中世の民衆十字軍のなかに近代の市民運動の起源を見出したり、中世のフォントブロー修道院を近代以降のフェミニズムの起源に位置づけたりするというような、おおよそ現在では、否定されている強引な起源探しが行われた。起源探しが不十分であると、時にはその不十分さを咎めるだけでは済まされず、研究者としての適格性にまで追求は及んだ。近代のパリコミューンの起源に中世のコミューン運動を位置づけないような研究は問題意識が低く意味がないと切って捨てられたのである。

理想の社会をつくるための変革のサイエンスという特徴、近代の問題の起源探しという特徴は、マルクス主義の唯物史観の立場に立つ歴史学者だけの話ではなく、1945年以降の歴史学者のコミュニティー全体に影響を与えるものであった。その意味で近代史研究者のみならず、中世史研究者にとっても戦後歴史学の遺産を今一度再考することが必要であろう。

3 国民国家論

戦後歴史学には、国民国家を自明のものとして捉えるという傾向、つまり一国史観の傾向がみうけられた。この特徴は近代歴史学の特徴をそのまま継承したものである。シンポジウムの「問題提起」は、「個別市民社会の動向や病理の発見は社会学や心理学が、ナショナル・アイデンティティの構築には、歴史学、文学、言語学が大きな役割を果たすことになる。この間、学問的営為は、その自由と中立性を金科玉条とし、個性記述につとめてきた。人間社会における「真理」の追究といってもよい」という。これは、近代の人文知に対するあまりに理想主義的な見方ではないだろうか。フランスの歴史学に関する限り、その出発点から国民国家に奉仕する学知であった。つまり原罪を背負っていたのである。フランスだけではなく、ベルギーでも同様である⁵。戦後歴史学では、社会経済史が台頭したが、社会経済史学の泰斗アンリ・ピレンヌは、国民国家に奉仕するどころか、その基盤を創り上げた歴史家であった。ピレンヌは近代に俄かに成立した国民国家ベルギーの歴史を創作し、過去にさかのぼって正統化した。その功績が国民に認められ、ベルギーの国民的歴史家として敬愛された。純粹客観を装う社会経済史が近代の垢に塗れた学知であることは、案外知られていない。

シンポジウムの「問題提起」では、原初の人文知は自由と中立性を金科玉条とし、人間社会における「真理」を追究す

るものであったが、そうした自らの立場を不問にし、誕生時に焼き付けられた刻印を忘れてしまったという。だが、フランスやベルギーの近代歴史学の創設期を見る限り、近代国民国家という認識の枠組みこそが刻印であり、そのなかで「真理」が追究されていたにすぎないことが理解されるだろう。

近代歴史学の創設期には国民国家や一国史観は、共和政を支持する歴史家の頭の中でつくられた被造物であったことを知っている人々は依然として多数存在していた。アンシャン＝レジームを支持する王党派の歴史家や共和国以前にソルボンヌなどのキリスト教の教育機関で教育を受けた人々は血なまぐさい革命の理想と現実の落差も見聞により知っていた。ところが戦後歴史学では、国民国家や一国史観がつくられたものにすぎないという事実が忘却された。近年、戦後歴史学に対する反省から、戦後歴史学が自明のものとしてきた国民国家という枠組みを批判的に検討する国民国家論という考え方があらわれた⁶。このシンポジウムの「問題提起」が国民国家論の影響を受けた問題意識でまとめられている以上、本来ならばシンポジウムを行う前提としてそれを理解することは不可欠であろう。最近の世界史の教科書では、近代の国民国家成立以前には「イギリス」という国名は使われず、「イングランド」と表記され、中世の「ドイツ皇帝」は「神聖ローマ皇帝」と表記される傾向が看取される。戦後歴史学を乗り越えるべく、歴史学の国民国家論の研究成果が次第に教科書

に影響を与え始めているといつてよい。

かつて国民国家の樹立によって人々は救済されるという神話が流布した。そして今、国民国家さえ克服されるならば、天国が到来し救済されるかの如き幻想が流布しているのではないか。本論考では、戦後歴史学の特徴のひとつとして、終末史観、救済史観を指摘したが、国民国家論においてもその終末史観、救済史観が完全に乗り越えられているようには思われない。国民国家さえ打倒されれば、人文知は再生されると看做す救済史観には疑問が残る。国民国家を消滅させることはパンドラの箱を開けることであり、それによって民族紛争や宗教紛争が激化し、人文知の再生どころではないという事態が起こりうることも想定しなければならないだろう。

4 ヨーロッパ中世史研究の刷新

このシンポジウムの課題は、国民国家論によって戦後歴史学を乗り越える、さらには戦後のナショナルな人文学をも乗り越えるというものである。この点に関するヨーロッパ中世史研究者の試みを概観したい。ヨーロッパ中世史研究の場合、そもそも国民国家の起源を探るという問題意識は今では少数派である。その上、必ずしも国民国家論の影響を受けて、そのような学問的傾向をもつようになったわけではない。国民国家論は近代史研究者の間で練り上げられた概念である。それをそのままヨーロッパ中世史研究に適用するならば、近

代史の前史としてしか中世史を捉えていないことになるだろう。それでは、国民国家の起源を探るという旧来の戦後歴史学の方法論の問題点であった近代史への中世史の従属という特徴を引き継ぐことになってしまう。それゆえヨーロッパ中世世界の普遍性と特殊性はどこにあるのか、という問題を立て、研究は進められることが多くなった。2014年頃の学会動向を網羅的に検証してまとめた「回顧と展望」の内容を振り返りつつ、国民国家論の観点から素描したい⁷。

フランス近代歴史学の創始者ジュール・ミシュレは、共和国の成立に立会い、国民国家フランスの歴史を叙述するという使命を持っていた。ミシュレといえども、時代の制約を免れることはできなかったのである。2014年に邦訳が刊行されたミシュレの若き日の日記と書簡集『全体史の誕生』（藤原書店）⁸のなかの、諸学は一なるものであり、一見もっとも離れていると見える知識も、本当は相関し、全体で一つの体系を形成するという趣旨の記述に着想を得て、21世紀のヨーロッパ中世史研究者たちは、ミシュレの全体史の構想を共同研究という形で具現化しようとしているように思われる。そしてミシュレの前に障壁として立ちはだかった国民国家の壁をも越えようとしているように見える。歴史学だけでなく、ヨーロッパ中世にかかわるあらゆる専門領域の人的資源を動員した西洋中世学会が2009年に設立されたのも、ミシュレの全体史の構想と無関係ではないだろう。この学会は、歴史、

文学、哲学、音楽、美術、建築など、人文諸学のあらゆる分野の専門家で構成されている。従来の専門の枠組みを再編する大事件といえよう。本大会とは別に若手セミナーが関東と関西でそれぞれ行われた。関東では年配の権威者がヨーロッパ中世学の真髄を未熟な若手に上から教え諭すという啓蒙主義的形式のセミナーが開催されることとなったが、関西では関東のような形式はとらず文字通り若手による若手のためのセミナーを企画しようということとなった。こうして轟木広太郎氏をリーダーとする第1回関西若手セミナーという若手のお祭りが京都女子大で行われ、ヨーロッパ中世にかかわる人文諸学のあらゆる分野の若手が集まり、シンポジウムを行った。その際、屋台の縁日のような感覚で他の分野の人に気軽に質問できるようにと願いを込めて、図師宣忠氏の発案で西洋史関係者が主導する学会としては初めてポスターセッションが導入された。当時としては、ポスターセッションは理系のプレゼンテーション方法であって、西洋中世学に取り入れたらどうなるかとても不安であったが、今では西洋中世学会では毎年取り入れられている。さらに西洋史学会でも取り入れられ、ポスターセッションだけで学会が行われる年度もあったほど、一般的になった。人文諸学の共同研究を主軸とする西洋中世学会の創設（2009年）から現在までのシンポジウムでは、「21世紀の西洋中世学」、「メディアと社会」、「ヨーロッパとイスラーム」、「中世とルネサンス」、「中世の

なかの「ローマ」、「西洋中世写本の表と裏」というように、人文諸学のあらゆる分野からのアプローチが可能なテーマが選ばれている。これとは別に創意工夫を凝らした若手セミナーがあり、「最後の晩餐」や「薔薇の名前」をテーマとして、人文諸学のあらゆる分野から若手研究者が集い、議論するという試みも第1回から引き続き行われている。当時はおそらくぎりぎり若手であった私は、年配の研究者のなかに鬱陶しい人がいるから、よそに行って欲しいなどとぐちを言っていたが、今では鬱陶しがられる年配の立場となってしまった。人文諸学が衰退したといわれて久しい。だが、歴史学に関しては、戦後歴史学は衰退したのかもしれないが、若手研究者は困難な状況のなか、独創的な機軸を次々と打ち出し、ヨーロッパ中世史を中世学という大きなカテゴリーで捉え、歴史学の刷新に努めているといえよう。

国制史と社会経済史はともに、国民国家の枠組みのなかで発展してきた。専門を尋ねられたとき、「歴史学」あるいは「西洋史」というカテゴリーで答えると十分に理解されず、必ずといってよいほど研究対象とする国名を訊ねられた。ドイツ史は「ドイツ学」フランス史は「フランス学」イタリア史は「イタリア学」の中の一分野と看做されることも少なくなかった。ヨーロッパを研究している、あるいは歴史を研究しているという説明では納得せず、どの国を研究しているのか答えるまで決して許してくれない人も多かった。だが、近年国別

の先行研究の伝統が根付く国制史、社会経済史ではなく、文化史の共同研究において、国民国家の枠組みを超える研究が多く現れた。これらの最近の共同研究では、ハスキンスの12世紀ルネサンス論を導き手として、中世近世（ルネサンス）の断絶よりも、その連続性を強調するという傾向が見受けられる⁹。早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所の設立も西洋中世学会とほぼ同じころ（2009年）である。つまり中世と近世（ルネサンス）をつなげて広く歴史を捉えることで、時代認識の枠組みにとらわれることから免れるようになった。早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所の機関誌『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』の執筆者は毎年、10名以上に達するが、その専攻は人文諸学のあらゆる分野に及ぶ。他に、歴史学者の時間と空間に対する感性と哲学者のテキストに入り込む能力の二つを同時に必要とするジャンルである「インテレクチュアル・ヒストリー」の試みも特筆に価する。この試みは、制度化されたアカデミズムの外側のマージナルな知的空間のなかで、歴史学、哲学、文学などの個別の専門分野に分割されてしまった近代の人文知を乗り越え、中世・近世の人文知の再生を目指すものである¹⁰。これは、第一級の哲学者と歴史学者のコラボレーションの試みである。今まで、この種の試みは、どちらかが主導権を握り、偏った内容になることが多かったが、「インテレクチュアル・ヒストリー」の試みは、哲学と歴史学が見事に調和してい

る。この研究グループは本気で学知の融合に取り組む実力ある若手のみで構成されており、ユーチューブを使っての内容紹介や出版記念イベントなどを行い、門外漢も参入できるよう配慮している。誰も読まない本や紀要は、いかに売り込みが足りないか、その結果人文諸学の成果が社会に還元されず、埋もれているかという点を深く反省させられる。他には、壮大な空間把握という特徴を持つ「中近世のグローバルヒストリー」とも呼べる共同研究も隆盛を誇っている¹¹。これは、イスラーム圏研究者と西洋史研究者の共同研究や、キリスト教、ギリシア正教、ユダヤ教、イスラーム教の研究者の共同研究などがあり、国民国家の枠組みを超える力強さを持っている。やはり、中近世を連続して捉えるという点で、最近の共同研究のトレンドを踏襲している。国民国家という横の壁だけでなく、時代という縦の壁も壊し、再編する試みが実践されている。

上述の如く、このような共同研究の大半は文化史研究である。したがって、ランケ以来の政治史やピレンヌ流の社会経済史を歴史学の中心に据える人々にとっては、ヨーロッパ中世史研究は衰退したようにみえるだろう。ピレンヌなどは、いまでは、ホイジンガの再評価に押され、すっかり影響力を低下させている。グーグルで検索すると、2015年6月26日22時41分の時点で、ピレンヌ5580に対し、ホイジンガ28700の検索回数となっている。ピレンヌは社会経済史を重視した

けでなく、建国間もないベルギーの歴史を編纂した国民的歴史家として尊敬を集めた。だが、ピレンヌの一国史観は今や批判の対象となっている。近代にベルギーという国民国家が建設される際に、それまで歴史上存在しなかったベルギーがあたかも近代以前から存在していたかのように叙述したことが批判の対象となったのである。近代以前はベルギーではなくフランドルという領邦国家が存在していた。現在、かつてベルギー史専門と名乗っていた研究者たちは、ブルゴーニュ公国史研究会を立ち上げ、歴史学の最先端をすすんでいる¹²。ブルゴーニュ公国は、ベルギー、オランダ、神聖ローマ帝国、フランスを越境する複合領域であり、一国史観の捉え方では理解不可能であったため、国民国家を基準とした各国史のなかに位置づけることができなかった。名文家の堀越孝一氏でさえも、結局この公国について、明確なイメージを人々に与えることができなかったのも、一国史観でしかものを見ない読者が相手であるならば仕方のないことといえる。時代は移り変わり、今では近代の国民国家の枠組みに入らないという理由で、これまであまり注目されなかったブルゴーニュ公国やアンジュー＝プランタジネット・ドミニオンズなどのテーマに注目が集まるようになった。

押され気味とはいえ、政治史の領域でも、国民国家の枠組みを超克すべく共同研究が企てられ、大幅な刷新が進行中である。人類学の方法を取り入れ、儀礼やコミュニケーション

ンの分析によって国制史の刷新を企てる「紛争解決史」¹³、ウォーラーステインの社会システム論に着想を得て、「核」「地域諸権力」などのキーワードを駆使し、戦後歴史学を呪縛してきた一国史観の超克をめざす「関係史」、従属理論以来の中心と周縁の二項対立という視点や、国民国家の国境の概念を問いただし、新たに「境域」というキーワードを提起する「境域・領域・辺境史」を挙げることができよう¹⁴。この分野では地理学の手法を取り入れつつ、建築学との共同研究も推進されている¹⁵。

ヨーロッパ中世史は人文諸学のなかに位置づけられ、国民国家の枠組みや時代の枠組みを越境し、「中世学」という新たな視点を獲得することによって刷新されているのが現状である。神学部につづく文学部の衰退、研究職のポストの削減、学問的有用性への疑問などの不安要因にもかかわらず、毎年のように学界動向でネガティブな総括がなされる他分野などと比べると、ヨーロッパ中世史研究は活況を呈しているように思われる。それは、中世史家が若き日のミシュレの精神に立ち返り、時代の制約に起因するミシュレのやり残した課題に立ち向かったからであるといえは言い過ぎだろうか。学際研究の華やかさに目を奪われがちだが、西洋中世学会では昨年は同志社大、本年は東洋大というように、毎年のように学会の大会において、実際に史料に触れる機会がもうけられている。そのような努力が力強く中世史研究を支えていること

も看過しえないであろう。

最後に、参加者および読者層について、十分に把握しきれていない点をお詫びしなければならない。シンポジウム当日は一般の参加者も多く来場された。まずは愛知大学文学部でただひとりの西洋史研究者として他の分野の方に語りかけ、議論を誘発するという責務を持って報告を行うべきだと考えた。なぜなら西洋史の専門家も、ヨーロッパ中世史の専門家も参加者のなかに見出せないばかりか、歴史研究者もほとんどいなかったからである。報告の内容はよくわからなかったとの感想も聞かれた。逆に、本報告では全く実証研究がなされておらず、歴史学の基礎的知識の確認が続き、退屈された方もおられるかもしれない。そのような方は2016年春に刊行予定の論文集(タイトルは準備中)に寄稿した拙論「アキテーヌ地方におけるプランタジネット家空間の統治構造と教会」をお読みいただきたい¹⁶。イギリスやフランスといった一国史では捉えきれない帝國的構造を持つといわれる複合領域を検討し、本シンポジウムの「問題提起」に正面から向き合った内容である。

おわりに

「人文知の再生」が何を意味するのか、不明瞭なまま開始されたこのシンポジウムを通じて、何がでてくるのか不安であるとともに楽しみでもあった。そして今もパンドラの箱を

開けるようなスリルを感じている。いずれにせよこの手のシンポジウムにありがちな予定調和にだけはしたくなかった。議論が噛み合わず物足りない点多々あった。はじめから「近代」が絶対視され、ハスキンスが叙述した12世紀ルネサンスの人文知が無視され、ブルクハルトが描写したユマニスムなどのルネサンスの人文知が看過されているように感じられたからである。この点については、西洋中世学会やインテレクチュアル・ヒストリーの動向を紹介し、反論を試みた。近代以前は古ぼけたものとして切り捨ててしまっただけではよいはずなのである。中世の学知といえば、神に関するサイエンスと人間に関するサイエンスが二本柱であるのに、近代から逆算して人文知だけを切り取ってみても、それでは世界の半分しか見ていないことになる。この点も物足りなかった。また西欧を尺度とした近代的人文知の発展が不十分で、国民国家も不完全な状態の西欧の周辺地域の人々にとっては、西欧に対する強い羨望と反発という二律背反もあって、人文知の再生や国民国家論を問いたす行為自体が、西欧中心主義による抑圧に感じられるかもしれないという点も指摘した。

「問題提起」では、戦後歴史学の一国史観を批判することがめざされた。これは明晰な問いかけである。だが「問題提起」には、戦後歴史学の民衆運動史、社会変革運動史などを特徴付ける啓蒙主義から発せられる「お前は何者か」という問いかけも含まれており、この表現形式がシンポジウム報告

者に理解され、問いかけに対する応答が得られることは困難であるように思われた。戦後歴史学のこの啓蒙主義こそ、フランス革命以来の「近代的思考＝理性」の典型ともいえよう。それゆえ、この表現形式による近代の超克の企てに若干の戸惑いを覚える。この近代の啓蒙主義的人文知に対する報告者たちの「自由放埒な思考＝野生」こそが、21世紀の人文知の再生へ向けての第一歩となることを祈念したい。

本研究はJSPS科研費（課題番号 15K02960）の助成を受けたものである。

注

1 渡辺節夫「フランス中世における国家とネイションの形成」渡辺節夫編『近代国家の形成とエスニシティ』勁草書房、2014年、145-181頁。

2 当初、この文書は報告書として纏めるよう要求された。ところが締切日を過ぎても十分に原稿は集まらず、その原因はシンポジウムの「問題提起」の意図が理解されず、議論が噛み合わず、論点がぼやけてしまったことに起因することがわかった。そこで締め切り日を過ぎてから報告書ではなく、論文として纏めることが決定された。本稿は締め切りを遵守し報告書として提出した文書を加筆修正し、論文の体裁に変更したものである。人文学のなかに西洋史を如何に位置づけるかという点については、服部良久、南川高志、小山哲、金澤周作編『人文学への接近方法—西洋史を学ぶ—』京都大学学術出版会、2010年及び南川高志編著『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開—』ミネルヴァ書房、2007年を参照。

3 伊東利勝「人文知の再生に向けて 問題提起」は、シンポジウム開始前にポスター、WEBサイトで告知され、シンポジウムの当日、参加者に配布さ

れた文書である。そこではシンポジウムの趣旨が明確に方向付けされている。

4 戦後歴史学については、伊藤定良、伊集院立『国民国家と市民社会（21世紀歴史学の創造1）』有志舎、2012年及び歴史学研究会編『戦後歴史学再考「国民史」を超えて』青木書店、2000年を参照。

5 ベルギー史学史については、青谷秀紀『『ブルゴーニュ公国』をめぐる20世紀初頭ネーデルラントの史学史的風景』『思想』1082、2014年、27-54頁を参照。

6 西川長夫『国民国家論の射程』柏書房、1998年及び伊藤定良、伊集院立『国民国家と市民社会（21世紀歴史学の創造1）』有志舎、2012年を参照。

7 拙稿「回顧と展望ヨーロッパ中世（一般）」『史学雑誌』第124編第5号2015年、312-313頁；拙稿「回顧と展望ヨーロッパ中世（西欧・南欧）」『史学雑誌』第124編第5号2015年、313-317頁。

8 ジュール・ミシュレ（大野一道編訳）『全体史の誕生』藤原書店、2014年。

9 徳橋曜「中世とルネサンス」『西洋中世研究』六、2014年、2-5頁。

10 ヒロ・ヒライ、小澤実編『知のマイクロコスモス 中世ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』中央公論新社、2014年。

11 甚野尚志・踊共二編『中近世ヨーロッパの宗教と政治－キリスト教世界の統一性と多元性－』ミネルヴァ書房、2014年。

12 マルク・ボネ著、ブルゴーニュ公国史研究会訳『中世末期ネーデルラントの都市社会－近代市民性の史的探求』八朔社、2014年。

13 Yoshihisa Hattori, *Political order and forms of communication in medieval and early modern Europe*, Roma, 2014; 服部良久編『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史：紛争と秩序のタペストリー』ミネルヴァ書房、2015年。

14 足立孝「中世ヨーロッパにおける『辺境』と文化の『共生』」『比較日本文化学研究』七、2014年、200-216頁。足立孝「『辺境』から『境域』へ、『境域』から『中心』へ」『史学研究』285、2014年、54-79頁。

- 15 加藤玄「中世フランスにおける『領域』史研究の現在」『都市史研究』1、2014年、135-142頁。
- 16 拙稿「アキテース地方におけるプランタジネット家空間の統治構造と教会」朝治啓三ほか編『帝国で読み解く西欧中世の権力構造（仮）』ミネルヴァ書房、2016年公刊予定（入稿済み）。